



六
花

5

2021

りっかはいくかい

蒲公英



山田六甲

追悼 撲泰三さん

花は葉になりていづこに吹かれけむ

西行 忌待 賢門院 璋子かな

蒲公英の国になりたる稲美かな

雨の日は竜宮城に降るさくら

老いらくの帯解く兼六園の松

あまりにも見事で藤に二日酔

水源地土筆の千手菩薩かな

高砂の松を抜き出て鯉のぼり

蝌蚪生まる咎の匂ひのする水に

現^{うつし}世に転げもどりし椿かな

窓前に向はば雪の匂ひかな

蒲公英に呪文をかけてゐたる蝶

笹舟に蟻の補陀落渡海かな

千

鉄の音



笹村

政子

白梅のうしろ紅梅海展く
剪定の鉄の音をくぐりけり
たんぽぽの絮をかざせば風となる
一瞬の濁りと化しぬ蝌蚪の水
涅槃図を巻きあぐ音のかすれけり
われのほか動くものなし枯木立
猫柳此の世の光まぶしめり
亡き吾子の小さき高窓囀れり
空耳か駅のホームに風花す
相づちの返らざる夜や草朧

▽剪定に来てくれた職人の下を潜ったのを「鉄の下を潜った」と表現した力に感服。今月号は以前より進歩していることにびっくり。「詩人は揺れているときに芸術性を発揮する」と、ある精神科医が言っていたがその通り、政子も童子も深い哀しみが襲って来てから、強く変化しつつある。たんぽぽの絮(わた)も風となるが見事な把握。▽蝌蚪の水とはオタマジャクシが沢山孵って群れている水のこと。オタマジャクシが何かの音でパツと動いた。その瞬間を捉えたのだ。こういう写生も俳句の魅力である。▽涅槃図を巻き上げる音を捉えて「かすれ」というのも、何十年、何百年も寺が年に一度絵図だけ巻き戻して壁に展示した歴史の音を感じ取っている。猫柳は六花句会に出した、席題によって詠んだであろう。河川敷の柳の芽が出て銀色の輝きを見せている。それを逆手にとって春の到来を「眩しんでいる」ととらえたのが佳い。駅というのは別れた人や亡くなった人の姿を無意識に探している場所である▽相づちが返ってきていた日常だったが、ふと常に傍らにいたはずの人がいないことに気づいた。そうだ夫はすでに亡くなっていったのだと気づく。亡くなっていったのは分かっていたのに、まるで二人で生活していた時のように話しかけたのか、独り言をつぶやいたのであろう。だが、何の反応もなかった。その淋しさやギャップはきわめて大きなものである。

夫の顔 ◎ 志方 章子

新年や夫の遺影に挨拶す
ちらちらと雪舞ふ夜や夫の顔
日脚伸ぶ夫居ぬ日々の止むなしと
線香に花の香りや春浅し
悲しきことけふでお仕舞ひ豆を撒く
豆を撒くけふは私の誕生日
穏やかならぬ晩年や浅き春
幾ばくの余生ならむや日脚伸ぶ
臘梅を嗅ぎに出てみる夕べかな
花言葉恐ろしきかな水仙花

▽私はあまり意識しないようになった。しかし鑑賞するときにはそれをはつきりと意識しておこうと思う。「あなたが亡くなってどん底の気持ちだったが、こうして新しい年を迎えることが出来ましたよお父ちゃん！」と遺影に呼びかけているのだ。これからしつかり生きていこうと思いますから見守ってくださいね。と手を合わせているのだ▽雪が舞う夜は夫の顔が浮かぶ。雪の夜は愛した人との思い出が強く思い出される。「赤い角巻二人でかぶり吞んで歩いた吹雪の酒場」という歌が流れて思い出にひたるのもいいもの▽花の香りがする線香が佳い。いわばその香りが春のさきがけ▽順風満帆に来ていたのに晩年は大変なことが起こった。春を待ちながら往時のことを振り返っている。春浅きが利いた句である。▽章子が節分に生まれたのをこの句で知った。その節分の日を境目に明日からは立春だから「悲しむ事は今日で終わり」とけじめをつけようとしているのだ。けっぱれ。

零れけり ◎ 升田ヤス子

臘梅の雨滴となりて零れけり
番ひ鴨千の水輪の上にな
狛犬の風と消えゆく枯木立
二夕声に懸巢飛び立つ枯木山
野焼きの火憂ひ抱へて見てゐたる
雨よ降れこの寒肥の染みるまで
寒肥とひとりごつれば母のこと
地に渦を描いてとんど待つ子かな
未熟なる杖のつきざま青き踏む
猫柳ここより暗渠長からむ

▽雨に臘梅の雫がこぼれたのを臘梅の香りがこぼれたようだと思わせた詩的誘導がうまくまるで香水が零れたかのように思わせる。そこにヤス子の今なお進歩する句境を認める。六花の作家に高齢化などはないことを示す証左。零れたその雨しずくは香りの高いシャネルのエゴイストのようである。▽番の鴨が沢山の水輪の上に泳いでいるという。ツガイの鴨だけを抜き出して詠んだ。オシドリは明るいイメージだが、鴨の夫婦には何か淋しさが漂うのは何だろう。他の鴨たちが帰って行ったあと、取り残されるのは番の鴨が多いからだろうか。それともカルガモかも▽狛犬がすばやく獣の気配を嗅ぎとつて走り去った。それを風のごとくと譬えたのである▽寒肥は寒の頃に撒いておく肥料でじつくりと地中にしみこみ、土の中で植物が吸収されやすい形にかわり春の生長期に効き目を表す肥料となる。それまでに雨が大量に降ると肥料の効果がへるから困るのである。祈るような思いが分かる▽とんどを待つ子どもたちの様子を捉えた。作者はとんどから少し離れたところに目を向けて詠んだのである。写生にはこういうことも必要▽杖を突くことに慣れていないことを未熟であると言った。本音は杖を突かなくて済むのがよいのだけれど、と思っている。おそらくご主人のことであろう。はらはらしながら歩行を見守っているのである▽猫柳の句は川に水を抜く暗渠のそばに開いた柳の花、猫柳を詠んだ。別府句会で出した兼題が「猫柳」だったから、皆必死でネコヤナギを探したという。探すだけでもすごいなあ、と思う。

うす氷 ◎ 藤生不二男

湧水をにごして芹を洗ひけり
おほかたは空にまぎるる柳絮かな
雨垂れのリズムよろしき雪解かな
光れるは余呉の湖なり鳥帰る
荒鋤のくぼみくぼみにうす氷
戻ればかたかごの影失せにけり
山の日の春竜胆におよびけり
三極の跳ねんばかりに咲きにけり
旋回の去りゆく鴨となりにけり
其向へば眼差しつとき雛かな

▽荒鋤のくぼみごとに薄氷が這っているという写生は、春耕の前に粗く耕した窪みの水溜まりで、寒々としているがすぐそこまで春が近づいている様子を捉えた▽ひな人形を正面から対峙したら以外にも眼差しが強いのだと感心している。雛人形の名前そのものが柔和であると思いついたことへの裏切りに驚いているのだ。もともと雛人形の起源は、古く縄文時代の土偶や古墳時代の埴輪にまでさかのぼる事が出来、いづれも信仰の対象物として用いられた事がうかがわれるという。平安時代には人形（ひとかた）形氏（かたしろ）等、疫病を払う為、或は災厄の身代りを願うなど宗教的、神事的意味合いが強かった。時がたつにつれて人形（ひとかた）や形氏（かたしろ）を川に流してしまう風習がうすれ、其の後は子供の誕生と共に枕元に置き幼児にふりかかる穢（けがれ）や災（わざわい）を移し守る天児（あまがつ）這子（ほうこ）が作られるようになり室町時代・江戸時代は祭として白酒や餅を食べる楽しい行事になり、江戸時代に入って雛祭が益々盛んになり、幼児の祓（おはらい）という意味も薄れ、女の子が美しく飾って喜んで遊ぶ風習となり、そのままに伝えられていると人形老舗では説明している。作者の観た人形の眼差しは「疫病」を祓う役目であり災厄を払いのける時の眼を観たのであろう。特に女雛は女子憧れの存在で雅でながら、一方で災厄を跳ねのける眼力を発しているときに気づいた眼差なのである。

麦芽ぐむ ◎ 善野 行

思春期のうぶ毛のやうに麦芽ぐむ
 大寒の雨や震災記録の碑
 浮島に離れて雨の浮寝鳥
 白骨を晒す枯木の遠さかな
 枯木立抜け騒がしき水辺鳥
 風強き日は哮えてるよ枯木立
 拾ひたる石ころ愛す枯野岸
 その昔都ありしと枯木宿
 なんとなく強き心地や日脚伸ぶ
 立春のひかりの窓に倚りにけり

▽「思春期の産毛のやうに麦芽ぐむ」でふと思いついたが、以前、行は鷺沢萌（さぎさわめぐみ）へ「なぜ死んだ」という哀悼を詠んでいたと思う。萌は「川べりの道」で第64回文学界新人賞を受賞してデビュー。1989年「帰れぬ人びと」で第101回芥川龍之介賞候補。その後も数かずの文学賞の候補になったが、2004年4月11日に35歳で自殺。同年代で自殺した、ことりも36歳。冥界はどうして才能溢れる若者を引き込むのであろう。行はおそらく同年代の萌に親近感を持っていたのだらう。俳句で挨拶句の長けた人は大成する。これからのような作品をこの世にもたらしてくれるのであろうか、楽しみ▽その昔都ありしとの句、都は奈良・京都・滋賀・福原など幾たびも変遷している。枯れ木がそれを語っているような宿に泊まって「南桐の夢」でも見たのであろう南桐の夢とは栄華のむなしいことのたとえ。昔、中国で、淳芋棼（じゅんうふん、という人が、酔って古い槐（えんじゅ）の木の下の眠り、夢で大槐安国に行き、王から南桐郡主に任ぜられて20年の間、栄華をきわめたが、夢から覚めてみれば蟻の国での出来事にすぎなかったという、唐代の小説「南桐記」の故事から。▽「白骨を晒す」の句、枯れ木の「遠さ」に詩的感覚の鮮明把握が佳い。中村草田男が「遠い」という感覚の句を詠んでいたのを羨ましいと思ったことがある。

投扇興



住田千代子

届かざるこの胸のうち投扇興
おほかたは外れが楽し投扇興
左義長の灰を留めし潦
筆始がたつく脚を落ち着かせ
大池の半分を空け鴨群るる
臘梅に安らぎといふ雨しづく
石段を紅き叫びに落椿
野の土を付けて揚りしいかのぼり
伸びらかに伸びらかにあり空の凧
落凧に空の青さの欠片かな

▽投扇興の面白さを二句。このひと投扇興の作品では群を抜いている。投扇興は思い通りに的に当たらない、その的を反れることがまた楽しいではないか、というのは生きてゆく極意におもえると達観。人生も思い通りに行かないからこそ楽しいと勇気を与えてくれる。思いどおりに行けばすぐに飽きがる▽鴨が所せましと群れている。「半分隙間がありますよ、どうしてそんなに狭く生きているの」とも思える句▽蟬梅のしづくは香りを閉じ込めた、というのかと思ったら「安らぎ」というから読者ははぐらかされた心地よさがある▽石段を落ち椿が初めて「赤き叫び」になったという発想に磨きがかかる。夢風撰候補▽「空の凧」の句、のびらかという表現は、「源氏物語・未摘花」に「あさましう高うのびらかに、先の方少し垂りて」というのがあり、凧が安定して風に乗ったさま、だろ。千代子作品は今凧のように一途に上昇中。

この重き悲しみを脱ぐ柚子湯かな 浜田久美子

冬至の日、柚子湯から上がるとき、重い悲しみを一時的にしろさっぱりと忘れられた、という精神状態を視覚的に置き換えて「脱ぐ」と表現したのはさすが。「脱ぐ」というのは艶冶な言い方だが、柚子の香りの効果とはこういうものだろう…。季語「柚子湯」冬。

六甲

飛ぶ鳥の足を丸める春隣
西へ行く舟眺めつつ日向ぼこ
ふと我に返りしベンチ春隣
海光の眩しかりけり冬鷗
肩車せし父と子に浜の春
望海の石燈籠や春隣
飲めるはず父の娘よ春隣
明けやらぬ目覚めの雨や春隣
菜の花の小鉢華やぐ一人膳